

## 中因発心と東因発心

小 峰 弥 彦

はじめに

卵は立たない、という一般常識があつて、はじめてコロンブスの卵の話しが成り立つ。だが「卵は立たない」というのは我々がそう思いこんでいるだけで、実際は立春に限らず卵は一年中立つのである。こんなことは案外色々な場面で見られる。絶対的な権威を持つ伝統教学の中にも、知らない間に思いこみで勝手な解釈をしている場合も決して無いとはいえない。たとえば、中因発心や東因発心といった、いわば常識と見られる曼荼羅解釈もその一つとはいえないだろうか。

さて、曼荼羅の五仏を、発心・修行・菩提・涅槃・方便の五転に配し理解しようとしたのが、中因発心と東因発心という考え方である。このうち中因発心とは、大日如来を発心、宝幢如来を修行、開敷華王如来を菩提、無量寿如来を涅槃、天鼓雷音如来を方便と配し、理解しようとしたものである。これに対し東因発心とは、宝幢如来を発心に配し順次展開し、大日如来を方便とする考え方である。

曼荼羅の理解に、なぜこのような二通りの考えがあるのか。いつからこのような説が出てきたのか。はたしてこ

の考えが、曼荼羅の解釈として妥当であるのか。このように、中因・東因両説の曼荼羅解釈には些か問題点が存在しているように思える。そこで、今はこの問題について、とりわけ重要な意味を含むと思われる『大日経疏』を整理検討し考えることにしたい。

## 1 梅尾説とその根拠

梅尾先生は、曼荼羅の五仏の解釈に「中因発心説」と「東因発心説」の二説があるとし、そしてその根拠は『大日経疏』にあるとする。次いでこれら二説について次のように述べている。すなわち、

中因発心というのは、中央の大日如来はすでに菩提心を發起し悟りを開いた已成の仏であるが、その仏が衆生利益のために八相化儀の次第を示すために、菩提の行を起し証果を示し、無住所涅槃に入りて、撰化方便を示す。その化儀が果の上からは、四仏となり、因の方面からは四菩薩となる。東因発心とは、中央の大日如来は因位において、発心し、修行し、菩提を得、無住所涅槃に入るといふ経路を経て、いま現に撰化方便の根源たる仏となったのであるといふことを示すので、四仏の初めたる東方を以て発心の位とするのである。<sup>(1)</sup>

と論じている。梅尾説は、中因発心の根拠として右のように『大日経疏』第四を引用する。まずこの点から検討するわけだが、はじめに問題となる『大日経』と『大日経疏』の当該箇所をあげておく。『大日経』には次のようにある。

次に四方に仏を想え。東方を宝幢と号す、身色日輝のごとし。南方の大勤勇は遍覚華開敷なり。金色にして光明を放ち、三昧は諸苦を離る。北方の不動仏は、悩を離れ清涼の定なり。西方の仁勝者、これを無量寿と名づく。

ここを釈して『大日経疏』は次のようにいう。

次に四方の八葉の上に仏を觀ぜべし。東方に宝幢如来を觀ぜよ。朝日の初めて現じて、赤白相輝く色のごとし。宝幢はこれ發菩提心の義なり。喩えば軍將の大衆を統御するに、要す幢旗を得て、しかして後に、部分齊一にしてよく敵國を破して大功名を成するのごとし。如来の万行も、また是のごとし。一切智に屬するを以て幢旗となし、菩提樹下において四魔の軍衆を降伏するゆえに以て名となすなり。色の朝日のごとくなるはまた彼と相應する義なり。

南方に沙羅樹王の華開敷仏を觀ぜよ。身相は金色にして、普く光明を放つ。離苦三昧する標相なり。始め菩提心の種子より、大悲万行に長養せられ、今遍覺の万徳開敷を成するゆえに以て名とす。離苦は即ち大空の義なり。この大空を証するとき、なおし真金の百練して、垢穢すべて尽きるのごとくなるゆえに、仏身の相もまた然なり。これは世間淨明の金なり。若し閻浮提金に比せば、すなわち色淺くして梢濁れり。彼の自然に鏡徹して清明なるごとなることを得ず。華葉上の仏は心量の因縁より生ずるを以てのゆえに差降あるなり。

次に北方において不動仏を觀ぜよ。離熱清涼にして寂靜に住する相になせ。これは如来の涅槃の智なり。このゆえに義を以て不動という。その本名にはあらず。本名は当に天鼓如来というべし。天鼓のすべて形相なく、また住処けれどもしかもよく法音を演説して、衆生を警悟のごとく、大涅槃もまた是のごとし。二乗の永寂にしてすべて妙用無きがごとくにはあらず。ゆえに以て喩とす。

次に西方に無量寿仏を觀ぜよ。これは如来の方便智なり。衆生無尽なるを以てのゆえに諸仏の大悲・万行もまた終尽なし。ゆえに無量寿と名すずく。<sup>(3)</sup>

これを素直に整理すれば、次のようである。すなわち、東・宝幢如来・發心、南・開敷華王如来・菩提、北・天

鼓雷音如来・涅槃、西・無量寿如来・方便、となる。しかし、梅尾説のように、これをそのまま中因発心を述べたものであると解釈するためには、いくつかの問題を解決せねばならない。私論は後述するとして、問題点のみを指摘すれば次のようである。

1、梅尾説は、棒線の箇所を根拠として宝幢如来を修行とするが、その前の記述に「宝幢は是れ発菩提心の義なり」とあり、これを修行といいきるには一考を要しよう。

2、開敷華王如来を菩提に配しているが、ここには菩提であると明確に記されてはいない。

3、五転の巡り方が、この場合東・南・北・西であること。これは『大日経』の説示によったものだが、この順序は次に述べる東因発心説とは異なる。無量寿如来が方便というのは中因・東因の両説にもあたらない。

以上の点を念頭におきながら、続いて東因発心説について見ることにしたい。梅尾氏はこの根拠として『大日経疏』第二十の文を引用する。

問う、宝幢仏は何の義なるや。答う、これ菩提心なり。世の軍中に幢旗あり、これ衆中の首、軍の標識なり。咸く瞻仰する所にして、進止の節これに随はざることなきがごとし。なおし一切の万行のごときは皆この菩提心のためなり。これを以て標とし主とす。ゆえに名を得るなり。

宝幢について、すなわち華開敷仏というは何ぞ。これ行の義なり。十度万行、菩提心を資けて次第に芽茎葉滋栄して可愛なり。ゆえに名を得るなり。

華開敷について阿弥陀というは何ぞ。これ受用仏なり。すなわちこれ大果実を成じてその果を受用すること無量なり。不思議現法の楽なり。皆名を得るなり。

つぎに鼓音仏とは方便なり。既に大果を得、豈に自受用のみあらんや。すなわち普ねく一切衆生のためにこれ

を演ず。種々の方便、成所作智なり。なおし、天鼓の音の思いなくして事業を成ずるがごとし。ゆえに名を得るなり。また前に北方阿閼というは経の誤りなり。これは瑜伽の義なり。これと相応せず。鼓音仏を以て定となすなり。<sup>(1)</sup>

梅尾説により、前述した中因発心の順序と同様に、四仏に対し短絡的に五転を合わせると、それは宝幢・発心、華開敷・修行、天鼓・菩提、無量寿・涅槃、となるはずである。しかし、『大日経疏』ではこうなっていない。以上によってつぎの問題点が指摘できよう。

(1) 四仏のうち、無量寿仏が菩提に配されるとすれば、涅槃はどこに位置されるのか。逆に無量寿仏を涅槃とすれば、菩提に位置する仏がいなくなる。

(2) 東因発心であれば、天鼓は方便にはなり得ない。

(3) 『大日経疏』にしたがえば、五転の順序は、中因は東・南・北・西であり、東因は東・南・西・北となる。

ここで気づくことは、大日如来に関して何ら説かれていないことである。五転を五仏にあてはめるならば、少なくとも大日如来は発心あるいは方便が当てられることになるはずである。さらに、五転の順序が中因発心と東因発心で相違すること、四仏に配する五転がきちんと配置されていない。その理由は後述するとして、梅尾氏が根拠とする以上あげた『大日経疏』の箇所のみで中因・東因説を論ずることは困難であろう。それゆえ、次にこの問題を図像との関連において考えてみたい。

## 2 図像との関連

胎藏図像には二つの系統があるとされる。たとえば四仏は、この系統の曼荼羅の解釈の違いから、図像に異なっ

た描写がなされている。これは既に、石田尚豊先生が指摘されているので、それに沿って言えば次のようである。すなわち、胎藏圖像にはA系統とB系統の二つがあり、このうちA系統は善無畏系、B系統は不空系とする。具体的には「胎藏圖像」はA系統に、「胎藏旧圖像」「現図胎像曼荼羅」はB系統に区分される。そして尊像は次のように相違する。

宝幢如来 開敷華王如来 無量寿如来 天鼓雷音如来

A系統 降魔印 与願印 禅定印 施無畏印

B系統 与願印 施無畏印 禅定印 降魔印

これで気がつくことは、まずA・B両系統とも無量寿如来は禅定印を結んでいること。さらには、降魔印をみるとA系統は宝幢如来、B系統は天鼓雷音如来となっていることである。この事實は、四仏を解釈する上で極めて重要である。すなわち、大日如来の悟りの展開を示すのに、A系統は四魔を降伏したところから始まり、B系統は四魔を降伏したところで終了していることである。この違いは、釈尊が菩提樹下での成道の時の在りようを、どのようにとらえるかの問題ともなるからである。この問題は後におくことにして、圖像の点から見ると、無量寿如来のみ禅定印で両系統とも変わりが無い。他の三仏のみが異なって示されていることがわかる。それ故、中因発心・東因発心の考え方でとらえることは、圖像的に見た場合、少なくとも東南西北というような順序によって、短絡的に五転を五仏に当てはめるだけの解釈では理解できないと思われる。なぜなら、中因発心・東因発心の考えが先にあって、A系やB系の曼荼羅ができたとすれば、無量寿如来が双方とも同じに表現されていることの理解が困難になるからである。

## 3 『大日経疏』にみられる五転

中因発心・東因発心の考え方は、阿字の五転とも関連するのでいくつか用例をあげ、検討してみたい。すなわち『大日経疏』第十二成就悉地品に次のようにある。

何のゆえに須らく八葉を觀じて、多ならす少ならざるべしや。これに二義あり。一には一切凡夫の心処なり。未だ自ら了すること能わずと雖もしかしその上に自然に八弁あり。合蓮華の形のごとし。今は但し此の心を觀照し、それを開敷せしむ。すなわち是れ三昧にして且つ便なり。しかもその理は、若し此の八葉の花を觀ずれば、すなわち理と相應するを得。此の八葉とは、すなわち是れ四方四偶なり。四方はすなわち是れ如来の四智なり。初めの阿字門はすなわち是れ菩提の心。次の暗字はすなわち是れ無上菩提。つぎの阿長字は是れ菩提の行の行。次の悪字はすなわち是れ大涅槃。その余の四偶の葉はすなわち是れ四摂法なり。

先ず阿字門によって菩提心を發す。……次に彼の果を知る。……次に五阿字義の字輪によって大果報を成ぜん<sup>(5)</sup>と欲うがゆえに、如来の行を修す。修行を以てのゆえに大涅槃を得証す。大涅槃を証するゆえに能く心性をみる。すなわち此の心は法界の体にして、本来常寂滅の相なりと知る。ゆえに最後の嚧字門なり。

また、字輪品には阿字の五転を次のように訳す。

いわゆる字輪とは、此れ輪転によって諸字を生ずるなり。輪はこれ生の義なり。阿字一字によって、四字を來生す。いわく阿は是れ菩提心。阿長は是れ行。暗は是成菩提。嚧は是れ大涅槃。嚧長は是れ方便。……

当に知るべし、この字輪はすなわち一切の真言の中に遍す。若し阿字を見れば当に菩提心の義としるべし。若

し長阿字を見れば当に修如来行とするべし。若し暗字を見れば当に成三菩提とするべし。若し嚵字を見れば証大涅槃とするべし。若し長嚵字を見れば当に是れ方便力とするべきなり。<sup>(6)</sup>

以上のように「成就悉地品」には、八葉とは如来の四智であるとし、四転の阿字が四仏であることを明確に示している。また「字輪品」には梵字を加え五転とする。すなわち、**𑖀・菩提心 𑖁・修行 𑖂・菩提 𑖃・涅槃 𑖄**・方便となる。この場合「成就悉地品」では、菩提心から涅槃までを四仏にあてており、形の上からは東因発心をとる。「字輪品」は、これのみではどちらの説ともいえない。さらには、双方ともこれを四仏あるいは五仏に配する時、東南北西とするか東南北西とするか、までは明示されていない。しかし、これら五転をもって中台八葉院をとらえる考えが、少なくとも『大日経疏』には基本的にあつたことは事実といふべきであろう。

おわりに

以上によって、胎藏曼荼羅の五仏を、発心・修行・菩提・涅槃・方便といった五転で理解しようとした考えが『大日経疏』にあることを述べた。しかし、これがいわゆる現在の常識的な理解としての東因発心あるいは中因発心という考えとしては、少なくとも『大日経疏』には説かれていない。東因・中因説によって機械的に五転を配す考えは、恐らくもう少し後のこととなろう。そもそも大日如来を、発心あるいは方便のみに限定することはできない。大日如来は菩提心そのものであり、五転全てである。すなわち、それが発心・修行・菩提・涅槃・方便との展開として示されるのである。それは、『大日経』に

その時、執金剛秘密主は仏にもうしていわく、稀有なり世尊よ、この諸仏の自証の三菩提を説きたもう。不思議法界は心地を超越す。乃至一切の支分より、皆悉く如来の身を出現したもう。遍く十法に至り、本位の中に



還来して住す。<sup>(7)</sup>

とあり、これを訳して『大日経疏』には次のようにある。

(如来は)究竟寂滅にして、言をもって宣ぶべからずといえども、しかしよく種々の方便道をもって衆生類のために、本性の信解のごとくに法を演説したもう。すなわち、これ一切智心の無尽莊嚴の迹を領解するなり。不思議法界をば、すなわち蓮華台にたとえ、種々の方便道をばすなわち蓮華葉にたとふ。<sup>(8)</sup>

このように中央の蓮華台に座す大日如来の悟り、その展開が五転という形となるのである。以上の検討の結果、五転の考え方は『大日経疏』にあるが、東因発心・中因発心の思想はここにはないといえよう。そこで、次に(1)東因発心・中因発心は、いつ頃成立した考え方なのか、(2)東南西北・東南北西というような、方角の問題と曼荼羅の関係、(3)弘法大師はこの問題をどう考えたのか、等々触れなくてはならない点がある。紙幅の都合上、これらの問題は今後の課題としておきたいと思う。

## 註

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| (1) 梅尾祥雲『曼荼羅の研究』126頁。 | (5) 大正39、706、上。     |
| (2) 大正18、5、上。         | (6) 大正39、723、中。     |
| (3) 大正39、622、下。       | (7) 大正18、4、上。       |
| (4) 大正39、789、下。       | (8) 大正39、609下—611上。 |